

平成二十九年 度

入学試験問題

国語

注 意

- ・問題は十四ページにわたって印刷してあります。
- ・試験時間は五〇分です。
- ・声を出して読むではいけません。
- ・答えは、問題の指示に従って、解答欄の決められた場所に濃く、はっきりと書きなさい。
- ・答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- ・答えはすべて別紙解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。

法
学
入
校

東洋大学

東洋大学京北高等学校

1

次の問いに答えなさい。

問一 傍線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- (1) 成功を誇示する。
- (2) 外国製品を排斥する。
- (3) 袖口のほつれを繕う。
- (4) 商品のサンプルを頒布する。
- (5) 相手を侮って痛い目にあう。

問二 傍線部のひらがなを漢字で書きなさい。

- (1) 困難にかんぜんと立ち向かう。
- (2) りんじんと親しくなる。
- (3) 山頂は空気がうすい。
- (4) 「走れメロス」はふきゅうの名作だ。
- (5) 適度にきゅうけいを取る。

問三 傍線部のひらがなを漢字に直したものととして適切なものをア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) きせいの概念にとらわれない。
ア 規制 イ 規正 ウ 既成 エ 既製
- (2) あの姉妹はたいしょう的な性格をしている。
ア 対象 イ 対照 ウ 対称 エ 対症
- (3) クラシック音楽をかんしょうする。
ア 観賞 イ 鑑賞 ウ 感傷 エ 観照
- (4) しんき一転して仕事に取り組む。
ア 新規 イ 新奇 ウ 心気 エ 心機
- (5) 四十年間同じ会社につとめる。
ア 勤 イ 努 ウ 勉 エ 務

問四 傍線部の品詞名をア～コからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二回以上使いません。

- (1) 校庭の桜ははかなく散ってしまった。
 (2) 今年の冬は例年より暖かくなるらしい。
 (3) 彼女のおどりは見るものを笑顔にする。
 (4) しかしながら、会議がそのまま無事に終わるとは思えなかった。
 (5) 彼は失敗を少しも恐れていないように見えた。

ア	動詞	イ	形容詞	ウ	形容動詞	エ	名詞	オ	副詞
カ	連体詞	キ	接続詞	ク	感動詞	ケ	助詞	コ	助動詞

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

ソフトボール部のエースで四番であった「私」（中溝）は中学三年の夏に肩を壊し、ソフトボールを続けられなくなってしまった。明泉女子高校入学後は、やりたいソフトボールができない日々を余生と考え、積極的になれずにいた。

高校二年生の晩秋、音楽家の娘で声楽を学んでいる御木元玲が指揮をした合唱コンクール（クラスがまとまらず、失敗に終わった）のころから、コンクールでピアノを弾いた千夏や、特に御木元玲へ、絡まった気持ちを持ち始めた。「私」は千夏が御木元玲に歌を習うということ聞き、御木元玲の正体を確かめたいという気持ちもあって、気がつく二人が歌の練習をするという音楽室の前にいた。

音楽室の中からは何も聞こえてこなかった。合唱部の練習が講堂で行われる水曜日に、浅原の許可を得て音楽室を使わせてもらっている、と千夏は史香に話していたそうだ。そして今日、放課後に千夏がいそいそと音楽室のほうへ向かうのを見た。この中いるのは確かはずだった。何をしているのだろう。どうして何も聞こえないのだろう。

そう思ってもう一步ドアに近づいたときだった。内側から、すつとドアが開いた。

あれ、と声が出た。驚いたような顔の千夏が立っている。

「どうしたの」

先に私が聞いた。千夏のほうこそ余程そう聞きたかったことだろう。

「今、練習始めようと思つたらこつちで物音がしたから、誰か来たのかなと思つて。吹奏楽の子とかときどき楽器取りに来たりするから」

「そんなんでいちいちドア開けに来るの。もっと堂々としていけばいいじゃない」

「あ、そうだね、ごめん」

なぜか千夏が謝っている。私の態度がそれだけ偉そうだということだろう。偉そうついでにいった。

「練習、見ていてもいい？」

千夏はピアノのほうを振り返った。そこで私は千夏以外にも人がいたのかと初めて気がついたふうに顔を向けた。御木元玲はピアノの前の椅子にすわっていた。彼女は立ち上がり、そのまままっすぐ私の前まで歩いてきた。

「見ていくだけじゃなくて、一緒に歌っていけばいいのに」

べ、と私は口籠もった。べつに、歌いたいわけじゃない。でも、べ、しかいえずに口を噤んだ。御木元玲の口調はあまりにも自然だった。

何もいえずに立っていると、彼女はまたピアノのところへ戻っていく。千夏が弾むような足取りで後を追った。どうしようかと思つているうちに、ピアノが鳴り始めた。これが、

*
 コールユーなんかだろろうか。ドアを閉め、ゆっくりとピアノのほうへ近づいた。聞いたことのある曲だと耳を傾けていると、やがて千夏が歌い出した。のびのびと楽しそうに。どんな名曲かと思えば、うちの校歌じゃないか。へえ、と思う。退屈な歌だと思っていたけど、こうして聴くと案外いい。

校歌を歌うことがどんな勉強になるのか知らない。御木元玲は千夏の歌いたいように歌わせて、自分は流暢りゅうちやうにピアノを弾いているだけだ。それなのに、ちよつと楽しそうだった。千夏あんまりうまくない歌が私を誘う。なんとなく私まで歌い出したくなる感じなのだ。やがて歌が終わると御木元玲のピアノも鳴りやんだ。校歌の余韻が音楽室に残っている。「私、歌を歌おうにも楽譜も読めないから。声の出し方も知らないし。そしたら御木元さんが、まずは好きな歌を歌おうって」

千夏が小声で説明してくれる。

「それで校歌？」

「うん。この学校に来てよかったな、って思うから」

そうか。そんな人もいるのか。この特に取り柄のないような学校に来てよかったと愛着を感じる人を間近に見て、驚くと同時にちよつと恥ずかしくなった。成り行きで入っただけだから、もう余生だから、学校は適当に出ておけばいいと思っていた。

①「週に一度、御木元さんに教えてもらって、あとは自分でなんとか——」

「教えてないよ」

御木元玲がきつぱりという。

「伴奏するだけ。ときどき一緒に歌うだけ」

「でもそれだけですつごく歌いやすくなるんだ」

千夏が熱っぽく語るのを、質問で遮せきった。

「あとは自分でなんとか、どうするつもりなの」

「だからさ、自分でも練習して、もしちゃんと歌えるようになったら、合唱部に入ろうかなって」

照れくさそうに千夏はちよつと俯うつむいた。おいおい。声に出しそうになって危うく言葉を飲み込む。ずいぶん小さい目標じゃないの。しかももう二年の冬だっというのに今から入部するつもりなのか、このおめでたい同級生は。

あきれているはずなのに、胸がじんとしている。千夏の素直なパワーはどこから来るんだろう。もしかして、この子にはぐるぐるはないんだろうか。いや、と私はブレーキを踏む。たぶん、ぐるぐるのない人なんていない。それを忘れちゃいけない。ぐるぐるぐるぐる、きつと悩んでいる。楽譜が読めないというのがほんとうだとしたら、ずいぶん勇気が要ったことだろう。同級生に初歩から歌を習うなんて。これから合唱部に入ろうなんて。そういう気持ち、すごいと思う。余生じゃないんだ。

②「今も現役でぐるぐるどろどろががつがつしている人が、なんだか光って見える。自分は降り

てしまったはずなのに、そういう人の匂いを嗅ぎ分けてはむかついていた。

認めなくてはいけない。余生ではない、本道を生きている人に嫉妬していたことを。

「歌ってくれてありがとう」

ピアノの前にすわったまま、不意に御木元玲がいった。

「あ、ごめん、歌ってなかった。聴いてた」

「違う、マラソン大会のとき。ゴール前で、クラスの人たちが私を励ますために歌ってくれたでしょう」

そうだった。そんなことがあった。七キロ弱のマラソンにあまりにも苦戦する御木元玲を励まそうと、トラックを走る彼女の脇でたぶん千夏か誰かが合唱コンクールの曲を歌い始めた。そこに三々五々、声が集まった。とっくに走り終えて芝生にすわっていた私も、史香とコリエが立つのにつられて立ち上がった。しかたがないな、まあ歌ってやってもいいかな、くらいの気持ちだった。積極的に歌ったわけではない。たまたま居合わせただけだ。

「あの合唱団の中に中溝さんがいるのを見つけて、なんだか目の前が開けた感じがした。やらなくちゃいけないことっていうか、やりたいことっていうか、そういうのが見えてきた気がした」

それって、誤解だ。ろくに練習にも参加せず、偉そうなことばかりいっていた私が急に応援する側にまわったものだから、この子は素直にうれしかったのだろう。案外かわいいのかもしれない。

「それで、何だったの、御木元さんのやりたいことって」

黒い瞳が一瞬、揺れた。それからほのかな笑みが浮かぶ。まさか、歌でみんなの心をひとつにするのが夢だとかはいわないでほしい。返答に困るから。

「楽しく生きること」

「は？」

「そのために、音楽があるんだ。ええと、音楽は目的じゃなくて手段だったってこと、かな」

③ ふうん、と私はいった。

歩み寄りかけた御木元玲が、また遠ざかっていくのを感じた。

楽しく生きるって、今の私には思いもつかない。やりたいことも、やるべきことも、もう手に入らない場合はどうしたらいいんだろう。

一呼吸置いてから、床の鞆を手を持った。

「帰るの？」

うん、と笑って軽く右手を挙げた。

「よかったら、またおいでよ。一緒に歌っていかない？」

ドアのところまで千夏がついてくる。④ 悪いけど、歌わないと思う。ほんとうにやりたかったことは、私にはもうできない。だからといって歌うわけにはいかない。千夏にとって

は、歌を歌うことがほんとうにやりたいことなのだろうと思うから。なんとなく片手間で歌ってみるなんてこと、できないじゃないか。

御木元玲は、この子の真剣さをわかっているのだろうか。だとしたら、えらい。誰かの真剣をちゃんと受けとめるのはものすごく大変なことだ。

⑤「じゃあね、ありがとう」

私は千夏と、奥にいる御木元玲にも聞こえるようにそういって、音楽室を後にした。

(宮下奈都『よろこびの歌』より)

*1 コールユーなんか…：コールユーブンゲン(合唱練習の教本)のこと。千夏は御木元玲に薦められてこの本を買った後、偶然「私」に会って本を見せている。

問一 「私」が御木元玲を意識してわざとしたしぐさがありますが、そのしぐさが入った一文の最初の六字を抜きだして答えなさい。

問二 傍線部①について、次の問いに答えなさい。

(1) 「私」の目には二人が歌の練習をする姿がどのように映っていましたか。本文中から一文で抜きだし、最初の六字を答えなさい。

(2) なぜ御木元玲は教えようとしませんか。その理由を説明した次の文の にあてはまることばを、本文中より指定された字数でそれぞれ抜きだしなさい。

音楽は A 6字 ための B 2字 であって C 2字 ではないから。

問三 傍線部②「今も現役でぐるぐるどろどろがつがつしている人」とありますが、「ぐるぐるどろどろがつがつ」とはこの場合どのようなことですか。三十字以上三十五字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③「ふうん、と私はいった」とありますが、この時の私の説明としてもっとも適切なものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 御木元玲の言葉の中に将来を見据えた冷めた自信が感じられた。

イ 御木元玲の言葉の中に返答に困るような音楽への夢が感じられた。

ウ 御木元玲の言葉の中に本道を生きようとする意思が感じられた。

エ 御木元玲の言葉の中に納得のいかないぐるぐるが感じられた。

問五 傍線部④「悪いけど、歌わないと思う」とありますが、なぜ「私」は「歌わない」のですか。理由を四十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部⑤「『じゃあね、ありがとう』私は千夏と、奥にいる御木元玲にも聞こえるようにそういつて、音楽室を後にした。」とありますが、ここでの「私」の気持ちとしても適切なものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 千夏が歌に対して真剣に取り組んでいることがわかったが、御木元玲がその真剣さをきちんと受け止めているのか不安に感じ、千夏を応援しようと思っている。

イ 歩み寄りかけた御木元玲のやりたいことを聞き、自分とは違うとはっきりわかることで御木元玲との距離感を確認でき、穏やかな気持ちになっている。

ウ 歌のうまくない千夏でも楽しそうに歌えることや歌の楽しさを知り、千夏とは別に御木元玲に歌を習ってみようかとひそかに企たくらんでいる。

エ 再び「私」から遠ざかっていった御木元玲だが、千夏と同じぐらいの真剣さで千夏と向き合っている姿を理解し、わだかまりがなくなってきたと感じている。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

多様な生き物が暮らす世界のなかで、自分たちには特別な地位があると考えたときから、人間はふたつの理由で「いのち」^①のありかを見失ったのかもしれない。

そのひとつは、このときから「いのち」に格差が生まれたことである。高級な「いのち」と低級な「いのち」が生まれた。もっとも高級な「いのち」の保有者として人間が位置づけられ、低級な「いのち」は顧みなくてもよいものになった。そしてこの「いのち」のとらえ方は、次に人間のなかにも高級な「いのち」と低級な「いのち」があるという発想を生みだしていく。ナチスがおこなったユダヤ人やロマ族^{*}の虐殺はその現れのひとつであったが、それはときに現実的なたちで、ときに潜在的な民族差別や人種差別、集団差別としていまなお私たちの社会の内部にある。

さらに「いのち」が格差をもつてとらえられるようになると、もっとも高級な「いのち」は、自己にとつては、自分の「いのち」だということになっていった。それが「いのち」を不明にしたもうひとつの原因をつくった。自分の「いのち」だけが何ものにも代えがたいものとしてとらえられ、自己と直接的な関わりのない多くの人びとの「いのち」は、集団としての「いのち」でしかなくなった。こうして人間の数だけピラミッドの頂点がある剣山のよような生命社会が生まれることになった。誰もが自己を頂点とするピラミッド構造のなかに生命をとらえるようになったのである。

A、こうして誰もが自己の位置を絶対視すればするほど、その「いのち」は居場所を失っていった。自分が感じている自己という高級な「いのち」は、他者にとつては、その他者の「いのち」ほどには尊重される必要のないものになった。自己をピラミッドの頂点においても、他者にとつてはピラミッドの下位に位置するものでしかなくなったのである。自分にとつては絶対的でも、他者にとつては十把一絡げ^{じゅうばいちから}の「いのち」に過ぎなくなつた。それは「いのち」の孤独を生んだだけではなく、「いのち」の価値を認め合う社会をも衰退させたのである。自己の「いのち」だけが絶対的なものとして浮遊している時代、「いのち」が自己の内部にしか存在しない時代がこうして生まれた。人間の「いのち」に特別な地位があると考えたときから、「いのち」に格差が生まれ、ついには自分でその価値をみいだす^②しかない孤独な「いのち」の時代が生まれていったのである。そのことが「いのち」のありかをわからないものにしてしまった。

人間の「いのち」には特別な地位があると考えことは、「いのち」がつながりのなかに存在しているということを否定することでもあったのである。すべての生き物たちの「いのち」はつながりをもちながら存在しているのだとすれば、人間の「いのち」もこのつながりのなかのひとつなのであって、特別な地位など所有してはいないことになる。つまり人間を特別視する生命観は、「いのち」を結び合うなかにとらえる思想の否定でもあった。「いのち」は関係のなかに存在していることが否定されたのである。そしてそのとき、「いのち」

のありかは最終的に不明になった。なぜなら「いのち」が存在するためには場をもたなければならず、場は関係によってつくられている時空だからである。

日本の伝統的な発想では、人間の「いのち」は特別な地位をもっていなかった。自然と人間を格差なくとらえてきたのが日本の伝統的な思想である。さらに付け加えれば、岩や石、土、水といった無生物をも、生物と同じものとしてとらえていた。

天台宗の最澄^{*2}が伝えたと言葉に「草木国土 悉皆成仏」がある。「草木」は人間を含むすべての生き物と読めばよい。「国土」は生き物の世界を支えている大地のことであり、土や岩、水などが含まれる。すべての生き物も無生物も、みな成仏することができるという意味である。この言葉は「山川草木 悉皆成仏」とも言い換えられることもあるが、「山川」は「国土」と同じ意味だから文意は変わらない。ここではあらゆる「いのち」は無生物を含めて平等なものとしてとらえられている。

この「いのち」の平等観を空間的にのみとらえたのでは、その思想を見誤る。Xの世界のなかで平等なのである。

B 草を食べる虫や動物もいるし、その虫や動物を食べる生き物もいる。このことを空間的にみれば、すべての生き物は平等だとはいえない。ところが草を食べて育った蝶^{ちょう}が次には蜜を吸いながら花の受粉を助けるように、時間を介在させれば生き物たちもつと複雑な関係をつくりだしている。すべての生き物たちは最後は土に帰って、他の生き物たちが暮らす基盤をつくりだしていく。この時空の営みのなかでは、生物も無生物も平等である。「草木国土 悉皆成仏」とはすべては成仏できるといっているのだから、それは空間的認識ではなく、時空的認識である。私たちの時空の世界のなかでは、すべては成仏できるといふことだ。C この時空のなかで、すべての「いのち」は平等なのである。

とすると、なぜすべての「いのち」は平等なのだろうか。現代的に解釈すれば、すべての命は尊いとか、生態系のなかですべての「いのち」は貴重な役割をはたしている、ということになるのだろうか。だがそれは日本の伝統的な考え方とは違う。伝統思想には、すべての「いのち」は一番奥では結び合っている、つながりながら存在しているという発想があった。そこに密教思想や華厳思想があったことはすでに述べたが、一番奥には結び合って成立している「いのち」の世界があり、それぞれの「いのち」はそこから伸びた突起のようなものだとでもいえばよいのだろうか。そしてこの結び合う世界を守っているのが神仏だととらえるのが、あるいは結び合う世界が神仏そのものだととらえるのが、^③日本の思想でもあった。

すなわち、それぞれの独立した「いのち」が平等だということではないのである。奥に共有されている「いのち」の世界があるから、元々すべての「いのち」は平等性をもっているということである。だから「悉皆成仏」も、独立した「いのち」がみな成仏できると考えるのは正しくない。奥で結び合っている「いのち」だから、そしてこの結び合う「いのち」の世界を守っているのが神仏であり、あるいは結び合う「いのち」の世界こそが神仏の世界だから、誰もが成仏できるのである。なぜなら生きている間はすべての生き物は個性をもつ

ているけれど、その個性は結び合う世界から生じた突起にすぎず、生から死への飛躍はこの個性の喪失であり、結び合う「いのち」の世界への回帰だからである。結び合う「いのち」の世界が神仏の世界であるなら、そこへの回帰は成仏である。

(内山節『いのちの場所』より)

*1 ロマ族…主に北インドのロマニ系に由来しヨーロッパに居住する移動型民族のこと。

*2 最澄…平安時代初期の僧。

問一 にあてはまる語句をア～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア しかも イ たとえば ウ ところが エ または オ すなわち

問二 傍線部①「『いのち』のありか」とありますが、「いのち」のありかについて筆者の考えに合致するものを、ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 様々ないのちとのつながりの中に存在する
 イ 他の人間との比較の中に存在する
 ウ 意思を持ち考える人間の中に存在する
 エ いのちを平等に考える空間に存在する

問三 傍線部②「孤独な『いのち』の時代」とありますが、なぜこのようなことになっていったのか、説明しなさい。

問四 にあてはまる二字の熟語を文中から抜きだしなさい。

問五 傍線部③「日本の思想」について次の問いに答えなさい。

(1) 本文における「日本の思想」に合うものを、ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人と人とはあくまでも平等であり、その「いのち」も等しく大切である。それは、人間が互いを尊重し、助け合い、つながりあえるからである。

イ 人は自然を利用しつつも、自然によって生かされていると考え、だからこそ日本人は自然に対して畏敬の念を持つ思想にいたることになった。

ウ あらゆる「いのち」は神仏が守る根本の世界で結びついており、だからこそ「いのち」は平等なのである。

エ すべての「いのち」は尊いものであり、そして生態系の中でもお互いに関係し合い、貴重な役割を果たしているのである。

(2) 本文における「日本の思想」において、生き物の死はどのようなものだとらえていますか。ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア あらゆる生き物はつながり合う一つの大きな「いのち」であり、それぞれの個体が死を迎えたように見えても、実は「いのち」全体は死んではないというもの。

イ 個体が死を迎えたとしても、それが他の生き物の「いのち」の糧となっており、「いのち」そのものがなくなるわけではないというもの。

ウ 個体の死は自分を頂点とする「いのち」の消滅を意味するが、他の生き物の「いのち」は影響を与えないため、生き物全体の存続には関わりがないというもの。

エ 生き物はそれぞれ個体を持っているが、それは奥で結びついている「いのち」の世界からの突起のようなものであり、死はその世界へ戻ることだというもの。

問六 現代社会における「いのち」に関わる課題や問題を一つ取り上げ、それが起きる理由を五十字以内で説明しなさい。

4

次の古文と現代語訳を読んで、問いに答えなさい。

(古文)

今は昔、平中といふ色好み^{*1}、さしも心に入らぬ女のもとにても、泣かれぬ音をそら泣きをし、涙に濡らさむ料に^②、硯瓶に水を入れて、緒をつけて肘に掛けてしありきつ。顔、袖を濡らしけり。

出居^{でい}の方を、妻のぞきて見れば、間木^{まぎ}に物をさし置きけるを、出でてのち取り下ろして見れば、硯瓶なり。また、畳紙に丁子^{ちようじ}入りたり。瓶の水をいうてて、墨を濃くすりて入れつ。ねずみの物を取り集めて、丁子に入れ替へつ。さてもとのやうに置きつ^B。

例のことなれば、夕さは出でぬ。暁^{あかつき}に帰りて、心地あしげにて、唾を吐き、臥^ふしたり。「畳紙の物のけなめり。」と、妻は聞き臥したり。夜明けて見れば、袖に墨ゆゆしげにつきたり。鏡を見れば、顔も真黒に、目のみきらめきて、我ながらいと恐ろしげなり。硯瓶^Cを見れば、墨をすりて入れたり。畳紙にねずみの物入りたり。いといとあさましく心憂^{うれ}くて、そののちそら泣きの涙、丁子含むこと、とどめてけるとぞ^⑦。

(現代語訳)

今は昔、平中という色好み^{*1}が、女の所でも、(帰る時に)泣けてくるわけでもないのに泣き声を立ててうそ泣きをし、涙で(顔を)濡らすというために、硯瓶^{*2}に水を入れて、(それに)ひもをつけて肘に掛けて持ち歩き回った。(その水を使って)顔や袖を濡らした。

(あるとき)出居^{*3}のほうを、妻がのぞいて見ると、長押^{ながし}の上に作った棚に(平中が)何かを置いたので、出たあと取り下ろして見ると、硯瓶である。また、畳紙^{*5}に丁子^{*6}が入っている。(そこで)瓶の水を注ぎ捨てて、(代わりに)墨を濃くすって入れた。(さらに)ねずみのふんを取り集めて、丁子と入れ替えた。そうしてもとのように置いた。

いつものことなので、(平中は他の女の所へ)夕方には出かけた。に帰って、気分が悪そうな様子で、唾を吐き、横になっていた。「畳紙の(中の)物のせいであるようだ。」と思って、妻は(その様子を)聞きながら横になっていた。夜が明けて(平中が)見ると、袖に墨がひどくついている。鏡を見ると、顔も真っ黒で、目だけがぎよるぎよる光って、自分でもたいそう恐ろしい感じである。硯瓶を見ると、墨をすって入れてあった。畳紙にはねずみのふんが入っていた。全くもって情けなくて、それからあとうそ泣きの涙(を用意すること)と、丁子を(口に)含むことは、やめてしまったということだよ。

(校注・訳 高橋貢『古本説話集』より※出題にあたり一部表記をあらためた箇所があります)

*1 色好み…女性との恋愛を楽しむ男性のこと

- * 2 硯瓶…硯に入れる水を入れておく容器
- * 3 出居…居間兼接待用の部屋。
- * 4 長押…柱と柱の間に渡す横木。現在の鴨居
- * 5 畳紙…折りたたんで懐ふとろに入れておく紙
- * 6 丁子…口に含んでよい香りをさせる香料

問一 傍線部①・③・⑥の意味をア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ①「さしも心に入らぬ」
- ア たいして愛していない
 - イ とても愛している
 - ウ たいして人気のない
 - エ とても人気になっている

③「暁」

- ア 夜明け前
- イ 日が昇って
- ウ 昼過ぎ
- エ 夜遅く

⑥「あさましく」

- ア すごいと思ひ
- イ うれしくなり
- ウ 驚きあきれ
- エ 意地汚く思ひ

問二 傍線部②について、平中が硯瓶に水を入れて携帯していたのはなぜですか。ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア いつどこでも、気に入った女性に対して手紙を書き、丁子の粉を溶いてその香で女性をひきつけられるようにするため。
- イ あまり深い深い愛情を抱いていない女の前でも、この水を涙に見せかけてうそ泣きをし、さも情が深いかのように装うため。
- ウ 浮気が発覚した場合、この水で顔や袖を濡らし、妻に対して、後悔の涙を流しているかのように見せかけるため。
- エ 丁子を口に含み過ぎるとのどが乾き過ぎて気分が悪くなるので、この水を飲んでのどを潤すようにするため。

問三 二重傍線部A「出でて」・B「置きつ」・C「見れば」の主語を、ア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を何回使ってもかまいません。

ア 平中 イ 妻 ウ 女 エ 作者

問四 傍線部④の「物」とは何ですか。(現代語訳) から具体的に六字で抜きだして答えなさい。

問五 傍線部⑤「顔も真黒に、目のみきらめきて」とありますが、なぜそのようなになってしまったのですか。その理由としてもっとも適切なものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 丁子を含み過ぎて体調が悪く、寝不足だったから。
 イ 焼きもちやきの女の所で顔に墨を塗られていたから。
 ウ 女の所に出かけられないように、妻が寝ている間に顔に墨を塗っていたから。
 エ 水が墨に入れ替わっていることに気づかず、うそ泣きに使ってしまったから。

問六 傍線部⑦において、「そら泣きの涙、丁子含むこと」をやめるようになった理由としてもっとも適切なものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妻と別れる計略が、逆に愛情を深めることになったから。
 イ 妻のはかりごとを神仏の怒りと思い込んだから。
 ウ 妻の計略のために、恋人との仲を裂かれてしまったから。
 エ 妻にはかられ、浮気な行動をたしなめられたから。

4			
問一	問二	問三	問四
①	ア	イ	エ
②	ア	イ	エ
③	ア	イ	エ
④	ア	イ	エ

2					
問一	問二	問三	問四	問五	問六
ア	(1) 御木元	楽譜	ウ	真剣	工
ウ	(2) 御木元	入読	ウ	歌	工
B	玲曰千	ろめ	ウ	歌	工
イ	千	いと	ウ	歌	工
C	千	る	ウ	歌	工
オ	千	に	ウ	歌	工

3					
問一	問二	問三	問四	問五	問六
A	ア	(例) 誰かが自分の「いろいろ」を大切にする一方、他者の「いろいろ」を尊重しなくなる	時	(1) ヲ	
ウ	ア	「いろいろ」を認め合ふことができなくなると「いろいろ」を尊重しなくなる	空	(2) 工	
B	ウ		3点		
イ	イ				
C	イ				
オ	オ				

4					
問一	問二	問三	問四	問五	問六
①	ア	A	相	工	工
②	ア	B	可	工	工
③	ア	イ	行	工	工
④	ア	イ	の	工	工
⑤	ウ	ア	小	工	工
⑥	ウ	ア	人	工	工

受 験 号	
受 番	
氏 名	

合 計	
-----	--

4
20

3
30

2
30

1
20